

財団だより

多摩川

1987. 12 第36号



ジョロウグモ (コガネグモ科)
♀は黄色と緑青色の目立つ横縞
♂は小さく褐色をしている



二ヶ領用水上河原堰・1611年開削された稲毛・川崎・二ヶ領用水の取水口として設置され現在に至る

■多摩川風物誌■

⑦ 多摩川の堰

砂利採取により被害を受けたのは、鉄道、道路の橋脚である。道路橋については建設がおくれたので、それ程問題とはならなかったが、鉄道は大きな被害を受けた。中流部の小田急線はその被害の程度が大きかった。京王線は橋脚整備のため、河川全断面にわたって床固めを行なって被害の発生をくいとめている。

大きな影響を受けたものに用水堰がある。用水堰の取水方法は自然流下にはじまり、蛇籠・聖牛等のような簡単な施設を取入口の前面におき、水位の上昇をおこさせて取水していた。これでも取水出来ないときは木工沈床をおいている。多摩川の用水堰の歴史はこのくり返しであり、戦後になってコンクリート堰が普及しはじめた。しかし、河床の低下により水位が十分とれず、取水地点を変更(上流に移動させる)せざるをえない所がいくつかある。前に示した大丸用水、日野用水はその一例である。

上流に移行する際に合口化が行なわれる例がある。合口により施設を経済的にし、かつ、管理しやすく安定して取水出来るという利点から行なわれるケースが多いが、多摩川では西府用水の四谷上堰と本宿堰の統合の例が唯一である。

河床が低下すると、堰とくにコンクリートのような永久堰の場合、堰自体は強固に出来ているが、下流が流され下流部がえぐられる場合がある。そのような場合堰が転倒モーメントをうけ崩壊する事がある。1970年洪水の上河原堰、1974年の四谷下堰はその例であり、堰の中央部が流出してしまった。このような被害をさけるため、堰の下流部側に大規模なエプロン(水たたき)を建設する例がある。宿河原堰はその代表例である。大丸用水、四谷上堰では小型のエプロンがある。

なお、ここで昭和用水堰について述べておく。この堰は他の堰と異なり、堰の地点を在来のそれより、約300m下流に移動したものである。この堰は東京水道の第一拡張計画に基づく羽村堰のコンクリート化により、十分な取水量がえられなくなったので、秋川の合流点より下流で取水を行なうようにしたものである。

なお、多摩川の本川の堰のコンクリート化は、東京市の小河内ダムの補償と、戦後の食料増産の政策の一環として行なわれたものである。

「多摩川における応用地理学研究」1977 市川新
(財)とうきゅう環境浄化財団(学術)
研究助成No.3より部分掲載

多摩川散歩

●五日市の秋川南岸コース

八王子実践高校 樽 良 平

豊かな自然にかこまれ、歴史と伝統の息づく町、五日市を歩く秋川南岸コースを紹介する。

五日市線増戸駅^{増ニ}から南へ数分、五日市街道を横断して下るとすぐに網代橋、なだらかな丘陵を前に秋川の清流を渡れば、川面に兩岸の木々が映える。ボートもあるので春から秋まで休日は賑わう。ステゴドン・オリエンタリス象の臼歯が出ている。

対岸の坂を上り左へ行けば程なく弁天橋、続く明るい雑木林の小径は旧鎌倉街道で、昔の名残りを留めている。周囲の畑は縄文中期の遺跡である。

この街道はゴルフ場の端を通して八王子へ抜けるが、手前左側の西秋川衛生組合のダムからは、日本最大の古象ステゴドン・ボンビフロンス象の化石骨が発見されている。

南側の道端に「御前石」なる穴のあいた石灰岩がある。その昔、鎌倉への途次、畠山重忠がここで休憩、馬をつなぐため指でエイッと穴をあけたという故事から、別名「駒繫ぎ石」とも呼ばれる。

ゴルフ場ごし西方に連なって見える小山は、弁天山と城山である。ここからバックして、この山を見ながらゴルフ場内を通過、右折して網代の集落へもどる。集落内段丘上の畑は、縄文時代前期から古墳時代の遺跡群とみられている。

網代センター前から弁天山に登る。山の雑木は四季を通じて美しいが、春は桜、ツツジの名所となる。登りつめた所には貴志嶋神社が祀られ、奥の院の弁天洞窟は珍しいチャート洞窟で、弥生中期の遺跡である。頂上に立つと西手に、北条氏の滝山城の出城であった城山が並ぶ。

元の道を下って秋川南岸をさかのぼる。左手の丘陵裾はカタクリ群生地で、春先の開花期がよい。

秋川を右下に見て行くと高尾橋に至る。兩岸に1500万年前、新生代第三期の直立した地層が見学できる。はげしい地殻変動によって地層が折れ曲り垂直に立ってしまったのだ。うしろの高尾山も

対岸の天竺山も、このような地下のエネルギーによってつくられた。高尾橋を渡らずに大光寺前に行くが、このあたりも縄文時代の遺跡地である。

天王沢はナウマン象の臼歯が発見された場所だが、天王橋を渡って留原^{とほはら}の広い段丘面へ出る。ここは先史時代の遺跡がもっとも多いところで、都道拡巾工事に伴う発掘調査で、縄文中期の複合住居跡5戸が出土した。

この都道を北に行くと中村に出るが、ここからも縄文晩期の敷石住居跡が発掘されている。

秋川橋の河床には1500万年前のいろいろな海棲生物の化石が見られるが、その頃このあたりが海であったことがわかる。秋川橋を渡りトンネルを抜けたら右手が五日市駅である。

まだ元気のある人は留原から小和田の町民グラウンドへ出ると、第六の崖で海底地すべりのあとが見学でき、堰下では植物化石[☆]が見られる。

川岸をさかのぼり小和田橋を右に見て行くと、小高い台地に臨済宗建長寺派の古刹、広徳寺が建つ。落着いたたたずまいを見せる総門と山門は町文化財、境内のタラヨウとカヤの木は都天然記念物、さらにイチョウの巨木が寺の古色を深める。

坂を下って佳月橋を渡り五日市街道を横切ると、反対側に五日市町郷土館がある。五日市の地質、古代から近代までの歴史が展示されている。

(文中☆印の資料は五日市町郷土館で見られる。)

案内図



私と多摩川



昭和2年の夏・福生の多摩川(現在のカニ坂公園前)

● 甦れ、福生の多摩川

橋本孝蔵

ここに一枚の写真があります。私が小学6年生昭和二年の夏、福生の多摩川（現在のカニ坂公園前）で泳いでいる風景です。ここは深さが1m位で飛び込み台の処を除くと比較的安全的な流れのゆるい場所でした。少し下ると流れは明神下の崖にぶつかり川巾もやや狭まくなり柳山公園下の蛇籠^{じよかご}にぶつかり水しぶきをあげて急流となり流れてゆきます。そこには背の立たない深んど（深い所）があり鮎やハヤが群れをなして泳いでいるのが良く見えました。昭和初期の頃の多摩川の姿です。

やがて村山貯水池が出来、羽村の堰から多摩川の水が送られるようになりました。それでもその頃は福生の多摩川の水量はあり、子供達は夏は水泳冬はカジカ取りなどをして楽しむことが出来ました。戦後米軍が横田基地に進駐し基地の整備の為に百台近い大型のトラックがブルトーザを使ってまたたく間に多摩川の砂利を川床が出るまで採りつくしてしまいました。かつては明治神宮や多摩御陵の敷砂利として使われていた良質の多摩川砂利も影を消してしまいました。多摩川は川底の赤肌を出し寒々としてあわれでした。

やがて奥多摩湖が出来ると大水が出なくなったせいか、その川床に雑木や雑草が茂り川原は一変して叢^{くさむら}に転じてしまいました。自然と云うものは本当に不思議なものです。奥多摩湖から放流された水は奥多摩地区を豊かに流れ羽村の堰まで来ると、そこで村山貯水池の水門と玉川上水に取り入

れられ堰からもれた水だけが下流へ流れ出ています。それは膝まで濡らさずに向う岸へ渡れる程の水量です。

そこへ青梅、羽村の工業団地を結んだ下水路が3mの大きな吐け口を通して多摩川に流れ込みます。白い泡が出ています。臭気もあります。ですからこの下流には魚が住みません。釣人もいません。子供達もこの川には入りません。

川が完全に死んでいるのです。

私はこの下水路が建設された頃、町の都市計画課長をしていました。市街地開発という大義名分で下水路を計画した側に立っていました。そして二十数年を経過した今、多摩川が未だに汚れていると云う事にたまらなく心を痛めています。

新東京百景に選ばれた上水公園や多摩川の土手は私の家から歩いて五分、私の散歩道です。けれども私の足は下水路から下流へは向きません。何故か上流へ、きれいな水を求めて羽村へと向ってしまいます。今も尚死んでいる多摩川、子供も遊ばない多摩川を見るのが、たまらなくつらいのです。多摩川が可哀想で惨めです。

下水道が普及し、急速に白い泡も少くなりました。しかし下水はやはり下水なのです。もう少し多摩川のきれいな水がほしいのです。一年中魚の住めるような、きれいな水がほしいのです。

甦ってくれ、福生の多摩川よ。



甦れ！多摩川

●青梅シンポジウムに参加して

山道省三

11月5、6日の2日間にわたり、青梅市民会館において、「美化とトイレとまちづくりシンポジウム」が開催された。このシンポジウムの主催は西多摩地域広域行政圏協議会で、クリーン西多摩運動の一環として行われたものである。

「美化」と「トイレ」と「まちづくり」がどういう関係式になるのか、はたから見ると奇異に感じられようが、東京の奥座敷と呼ばれる西多摩地域は、首都圏の観光レクリエーション地域として多くの観光客が集まる。そこに観光地として快適な環境を維持するため、受入れ側と利用する側の双方がどう努力していけば良いかが目的であり、そのキーワードとして、「美化」や「トイレ」が挙げられたと解釈できる。そして、観光地としての体面をつくろう事以前に、自分達の街づくりとして考えてみようという事であった。

討論は基調講演の後、3つの分科会に分かれて行われた。第1分科会は「快適トイレとまちづくりを考える」、第2分科会は「水辺の再生と住民・行政の役割を考える」、第3分科会「美しい環境と地域の活性化を考える」がテーマであった。この分科会のうち、私は第2分科会に参加し、テーマに沿った各地の事例紹介とともに討議を行なった。

水辺の再生と住民・行政の役割については、5年程前、世田谷区でやはりシンポジウムを行ったことがある。この時は、水に親しむ施設づくりの過程で、安全対策に対する認識の違いが管理瑕疵の問題を生み、本来の親水性を阻害しているのではないか、というのが主旨で、住民と行政の役割について討論した。

今回は、水辺に対する住民・行政の認識が相当進んできた中で、水質浄化対策、住民活動からの要請など具体的な対策の中での役割分担について討論された。

この討論の中で得られた意見を私なりに整理してみると次のようになる。

- ① 行政側は施策の前提として、住民の意向や住民をどのように施策に関連づけるか、について十分な検討が望まれる。
- ② 行政の施設づくりは最少限度の基盤整備程度でよい。むしろ資金は、維持、運営のためにかけた方が有効である。つまり、住民が創意工夫していく余地を残して、運営しながら完成させていく方向が望ましい。
- ③ 維持、管理、運営のソフトな部分は地域住民へ委譲していく仕組みをつくる。
- ④ 逆にいえば、住民は維持・管理に対して責任ある体制をつくる必要がある。
- ⑤ 観光客という第三者に対し、快適な環境を維持することへの認識を得る。このためには観光という目的以外での仕かけが必要。

今回のシンポジウムの目的は、住民と行政の協力による快適な環境づくりにあった。しかし、奥多摩地域のように毎年多くの観光客が入り込む所は、住民と行政の協力だけではうまく行かない。訪れる観光客に対し、地域美化の意識を持ってもらわない限り、快適なトイレもゴミ箱もうまく機能しない。この理解を得るための仕かけは、単に観光目的に訪れる人に一時的にアピールするだけでは十分な成果は得られないだろう。もっと長い目で日常的な交流を図って行く仕かけが必要だ。

青梅市長の閉会のあいさつの中に、「青梅マラソンを開催して驚いたことに、外国からの参加者からコース沿いの多摩川の清流を見て、こんな美しい清流があつてうらやましい、と言われた」とあった。我々にとって多摩の清流や自然環境は共通の財産である。この環境を維持していくためには、観光以外の交流をもっと進めなくてはならない。マラソンやカヌー大会もいだろう。学校教育や住民活動として理解を深めるための交流が急がれる。それは多摩川に残された清流という意味からでもある。

《“多摩川およびその流域の環境浄化に関する 調査・試験研究”募集》

当財団は昭和50年から表記研究の公募を毎年行ってきました。既に203件の研究に対して助成金を交付し、144件の研究成果を得ることが出来ました。

昭和63年度も引き続き首都圏における「多摩川およびその流域の環境浄化に関する基礎研究、応用研究、環境改善のための計画研究」をひろく募集いたします。

対象者は、研究を専門とする方に限らず、一般のどなたでも研究に意欲のある方でしたら、ふるって応募して下さい。

研究について

多摩川は山梨県笠取山を水源とし、東京都と神奈川県の間境を経て、東京湾に至る138kmの一級河川です。その流域面積は、1,240km²といわれています。

多摩川を浄化するためには、その流域の環境をも改善しなければ目的は達成できません。

従って、河川や地下水の水質や水量、それらとかわりのある生物相や生物群集の研究、多摩川およびその流域の地質、地形などの自然科学的研究だけでなく、都市化と住民意識、土地利用と地域計画、川の歴史や文化、環境観や環境教育など人文、社会科学的研究も大いに歓迎いたします。治水、利水、親水と流域の環境改善のあらゆる領域にわたる広汎な研究を期待しています。

欧米に例をみない速さで、高齢化がすすみ人口の過密な首都圏の環境の中で、水域と陸域の統合体である多摩川の河川環境を考え直してみることは、極めて大切なことではないでしょうか。

公募締切日 昭和63年1月14日

応募についての詳細は下記事務局までご連絡下さい。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目16番14号(渋谷地下鉄ビル内)

電話 (03)400-9142 (財)とうきゅう環境浄化財団

年度別助成件数・助成金額

年 度	研究 区分	助 成 件 数			助成金額 (千円)
		新規	継続	計	
昭和50年度	A類	6	—	6	9,500
	B類	—	—	—	—
	計	6	—	6	9,500
昭和51年度	A類	5	6	11	19,994
	B類	—	—	—	—
	計	5	6	11	19,994
昭和52年度	A類	17	4	21	28,285
	B類	6	—	6	1,985
	計	23	4	27	30,270
昭和53年度	A類	8	14	22	28,402
	B類	6	5	11	2,892
	計	14	19	33	31,294
昭和54年度	A類	11	13	24	36,875
	B類	7	5	12	3,382
	計	18	18	36	40,257
昭和55年度	A類	12	13	25	39,277
	B類	7	6	13	2,673
	計	19	19	38	41,950
昭和56年度	A類	9	13	22	40,974
	B類	4	5	9	2,187
	計	13	18	31	43,161
昭和57年度	A類	17	10	27	38,263
	B類	8	4	12	4,370
	計	25	14	39	42,633
昭和58年度	A類	10	18	28	44,548
	B類	8	5	13	7,836
	計	18	23	41	52,384
昭和59年度	A類	9	16	25	41,818
	B類	4	6	10	6,567
	計	13	22	35	48,385
昭和60年度	A類	15	11	26	44,777
	B類	9	5	14	9,119
	計	24	16	40	53,896
昭和61年度	A類	6	20	26	45,851
	B類	9	9	18	11,585
	計	15	29	44	57,436
昭和62年度 (10月1日現在)	A類	8	15	23	41,031
	B類	2	12	14	7,255
	計	10	27	37	48,286
合 計	A類	133	153	286	459,595
	B類	70	62	132	59,851
	計	203	215	418	519,446

財団からのお知らせ

<研究助成>

助成集報（第13巻）が完成しました。内容は下記の通りです。

助成集報（第13巻）

研 究 課 題	代 表 研 究 者	所 属
●多摩川中流域におけるカタクリ群落の分布と生態および保護育成に関する研究	鈴木 由 告	カタクリ研究同好会代表
●多摩川を活用した環境教育の実態と展望	丸 田 頼 一	(社)環境情報科学センター 常務理事
●多摩川支川の水質と下水路の浄化作用に関する研究	浦 野 紘 平	横浜国立大学工学部助教授
●多摩川上流地域における環境浄化のための水源林管理システム化の策定に関する調査研究	志 村 博 康	東京大学農学部教授
●多摩川下流域底泥における有機物の嫌氣的分解	滝 井 進	都立大学理学部助教授
●多摩川感潮汐域における塩分遡上および浮遊物質の輸送について	菅 和 利	芝浦工業大学土木学科講師
●八王子市域の植生について植物社会学的な解析による自然保護のための基礎的研究	曾 根 伸 典	自然環境科学研究所代表
●多摩川水系およびその流域における低移動性動物群の分布状態の解析	石 川 良 輔	都立大学理学部教授
●多摩川流域を代表する鳥類数種の個体群行動と塒および繁殖分布に関する調査研究 —多摩川流域におけるツバメ、スズメ、ムクドリ動態—	柿 澤 亮 三	(財)山階鳥類研究所研究員
●河川沿川の都市的土地利用の特性把握に関する研究	中 島 将 勝	(株)環境創造社代表取締役
●多摩川上流いわゆる奥多摩地域の環境保全のための資源調査および応用地理学的研究 —第2部—	徳 久 球 雄	青山学院大学教授

新刊紹介

「調べる・身近かな水」

小倉紀雄著 講談社 1987年8月

水質の状態を誰にでも、気軽に、簡単にできるように紹介した市民のための書。フィールドガイドとしてすぐにでも活用できる。

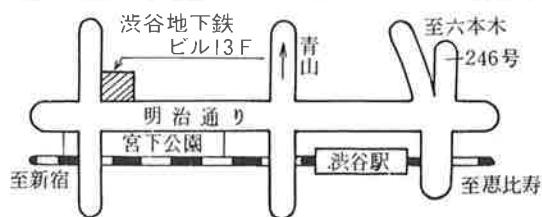
「都市に泉を」

本谷勲編著 NHKブックス 1987年8月

「野川に清流を」と15年もの間、独自の活動を続けてきた三多摩問題調査会の情熱にあふれた活動の記録。

・発行日 昭和62年12月1日

・編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)400-9142



*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1
TEL (0488)31-8125

おことわり 「川の用語」は紙面の都合上休載します。